

Computer Report

Vol. 59 No. 9 9月号 (通巻 780号)

はじめの言葉

■中国数千年の歴史と言われる中で、何代もの中国王朝が興っては滅亡して来ている。時の王朝が倒れる最大にして一番の原因／理由は、国民大衆の生活格差問題。一方に飢えに苦しむ大衆が居て、一方に贅の限りを尽くす政権支配層の存在があるという社会構造による矛盾が、ある時一気に爆発し、政権変動が繰り返されてきた。第二次世界大戦後の建国後 70 年余の中国も今、そうした社会矛盾が俄かに表面化しようとしている。

■朝鮮半島も、そうした中国政権の変遷に大きく左右されてきている。近くは、明王朝に追従する高麗王朝は、中国に清王朝が興ると半島内の親清派勢力の李王朝に変わるといった具合である。つまりは、朝鮮民族の意志で高麗王朝から李王朝に移行したというより、半島内の親明派勢力から親清派勢力に取って変わったのだ。独自政権を選択したというよりも、朝鮮半島は常に中国大陆の勢力に右往左往される存在だった。

■卑近な例を挙げれば、世継ぎ（世子＝セジャ）ですら半島政権が独自に決定することができず、常に中国政権にお伺いを立ててきたといった具合だ。21 世紀の今、北朝鮮が、共産主義体制を標榜しながら、政権の跡目相続を中国政権のご意向を伺いながら進めているという事実に、これを確認できる。絵に描いた漫画のような歴史的事実を、今、世界中が確認している。文字通り、独立政権国家とは言い難い半島事情であることが解る。

■豊臣秀吉が朝鮮征伐をしたとされるが、正しくは、秀吉が目指したのは中国明王朝であり、朝鮮半島は単なる通り道に過ぎなかった、というのが歴史的事実として伝えられる。思いがけず秀吉軍の侵攻を妨げる半島軍との間に戦闘が起こったということだ。少なくとも、秀吉軍の目標には半島勢力は入っていなかった。事実、半島勢力も自らの意志で秀吉軍と戦ったわけではなく、明政権の意向を汲んだというのが歴史的事実なのだ。

■歴史とは、実に厳しいものである。周辺隣国へ追随し、常に戦々恐々としながら周りの様子見を積み重ねてきた半島国家の歴史的被害者意識には根強いものがあるようだ。中国へ何千年に渡る朝見外交を重ねてきた国民には、DNA として、朝見すると見返りが受け取れるものだという期待／習性が沁み付いてしまっているようだ。日本への戦後賠償の限らない要求も、まさにその民族的習性の表れと言えるかもしれない。

■だがしかし、戦後の日韓間の外交交渉の積み重ねと両国間に積み上げられた努力の大半を、平気でご破算にしてしまう横暴さには、改めて驚愕してしまう。それも、日本の自衛隊機へのレーダー照射という事故を巡って付いた嘘に始まり、その嘘をさらなる嘘で隠蔽しようと、自ら嘘の蟻地獄に落ちるような様になっている。中国からどんな扱いを受けてきたかは知らぬが、長い歴史過程が残した結果なのだろう。

■国家が国家をなしていくには、それなりの自覚と覚悟がなくてはならない。他国と他国の間に存在する国家（一応、国家と言っておく）を、回廊国家というらしい。常に、他国の関係で不安定な存在感を噛みしめることを余儀なくされる。戦闘地域に一時的な非武装／非戦闘地域が設定される如くに、まさに回廊国家は、国全体がそういう位置づけとなり得る。半島国家の苦しみと悔しさの本質だと言えるかもしれない。（藤見）